

令和8年（2026）2月7日

# 金棒池古墳第2次発掘調査 現地説明会資料

神戸女子大学考古学研究室

## 調査の概要

所在地 神戸市西区神出町金棒池 1-1 調査期間 2026年1月31日～2月12日  
調査主体 神戸女子大学考古学研究室 連携協力 神戸市文化スポーツ局文化財課

## 第2次調査の目的

有力者の墓を大きく作り、葬ることを社会的に承認していた3世紀中頃から6世紀までのおおよそ350年間を、**古墳時代**と呼んでいます。この時代、北海道・東北北部と南西諸島とを除く日本列島の広い範囲に、約16万基の古墳が作られました。このうち、金棒池古墳のような形制をとる例を**前方後円墳**と言います。16万基のうち、前方後円墳は4700基ほどしかありません。

古墳の形や規模は、古墳時代の政治秩序を解き明かす重要な手掛かりです。ところが金棒池古墳は、損傷が甚だしく、本来どのような形だったか、規模はどの程度であったか、がわかっていませんでした。

神戸女子大学考古学研究室では、2023年度からこの古墳の調査・研究に取り組んでいます。2023年度に測量図を作成し、昨年度の第1次発掘調査では、失われた前方部の墳端を検出して、本来の**サイズ**が全長30mであったことを突きとめました。調査最終年度にあたる今回の第2次調査の目的は、古墳の**形**の解明です。かけがえのない遺跡を**将来の神戸市民へと着実に受け渡す**ことができるよう、この古墳の基礎データと、損傷の度合いに関する精確な情報を、神戸市当局に提供することが目標です。

## 第2次調査の成果

【Y区（後円部湮滅部分）の成果】 金棒池古墳は、後円部の墳頂から北側にかけて、大きく壊れています。江戸時代以来、破壊は何度かに互ったようで、明治16年（1883）頃の破壊の際は、鏡片、玉類、耳環、装飾付須恵器を飾った人物像が出土しました。これらは現在、宮内庁書陵部に保管されています。

過去に掘り出されたこうした遺物の残余が散らばっているかを確認するため設定したのが、Y区です。結果、須恵器のほか、縄文時代の石鏃が出土しました。さらに東辺に設けたトレンチでは、後円部を囲む周溝の一端も検出しました。周溝内出土の須恵器は**1500年前の例（TK10型式か）**とみられます。

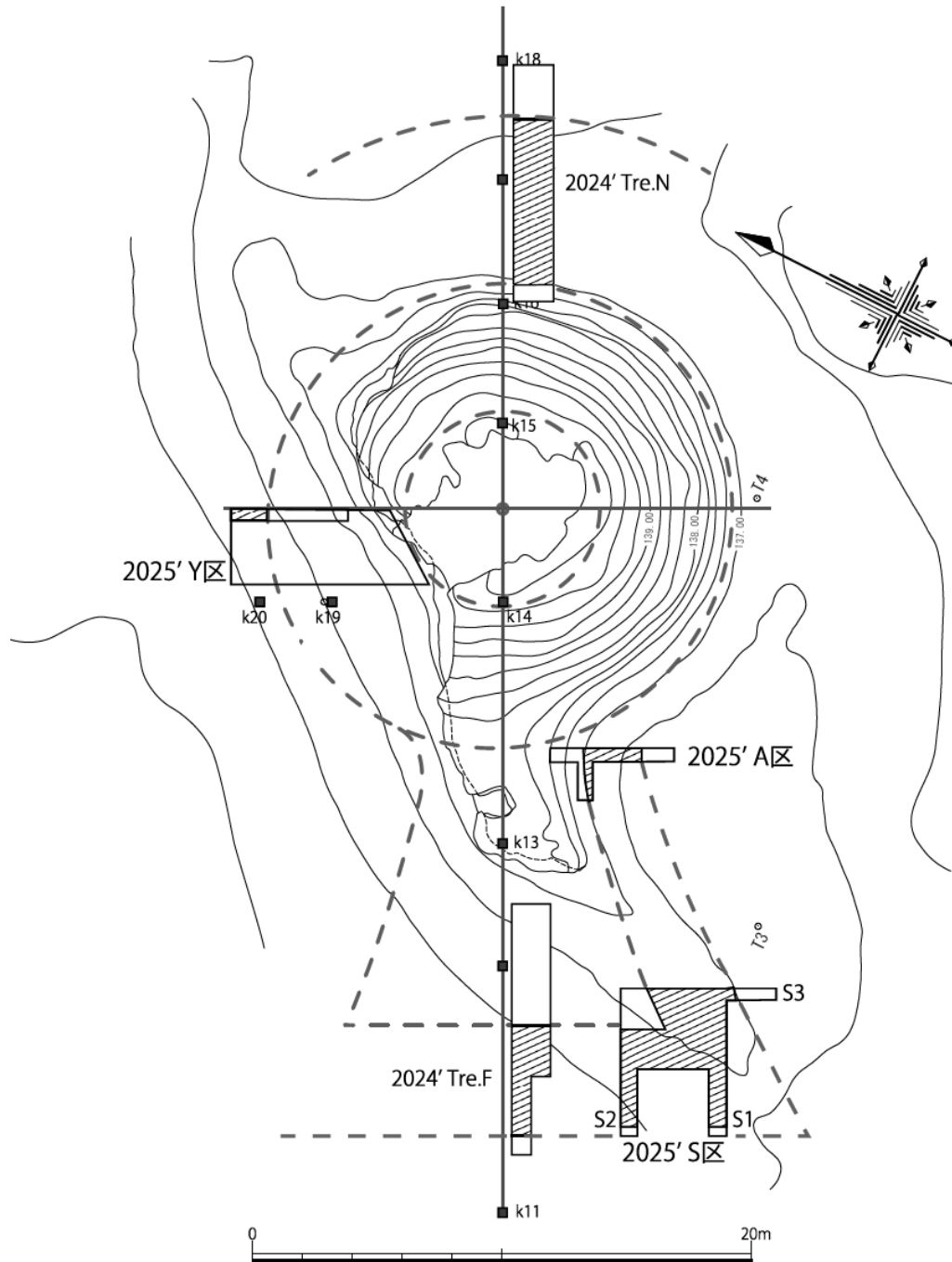
【A区（くびれ部）の成果】 くびれ部の形状を明らかにするため、幅0.75m×長さ5mのトレンチを設定しました。結果、地山を削り出した墳丘の端と、その周囲にめぐっていた周溝を検出することができました。周溝の幅は3.1mで、予想していたよりも狭く作られているようです。周溝内からは、**装飾器台**をはじめとする数多くの須恵器が出土しました。

**MT85型式に訂正**

【S区（前方部）の成果】 前方部南角（かど）の検出をめざして、3本のトレンチを設定しました。まずは昨年度の第1次発掘調査の成果をふまえ、1次Fトレンチの南方8mの地点にトレンチS1を設けましたが、角（かど）にあたる部分を捉えることはできませんでした。

そこで南方5mまで戻ってトレンチS2を開けた結果、古墳の墳端と周溝とを検出でき、次いでS1・S2と直交する方向に設けたS3でも、墳端と周溝とを検出することができました。これらによりようやく目星が付き、無事に前方部南角（かど）をつかまえることができました。

A区で検出されたくびれ部とを線で結ぶと、前方部の形状が復原できます。これまで予想されてきたよりも、**スリムであったことがわかりました**。



こちらをご覧ください  
第5弾を配信中です。

**You Tube**

金棒池 で検索！

**検索**



金棒池古墳の発掘調査は、2024年度大学発アーバンイノベーション神戸「神戸最後の前方後円墳」の実態解明と持続的保全・活用方法の構築をめざした総合的研究の助成を受けて実施しています。